

必要がある。それは、機器の性能の問題ではなく、方式がまちがっているのではないか(?)と。つまり、2チャンネル・ステレオこそ正しい再生方式であるとか、5.1チャンネルでホールの響きが味わえるとか巷間いわれているが、ほんとうにその方式でコンサート・ホールの響きが聴けるようになるのだろうか？

筆者は立体放送なるものが実施された当時から、コンサート・ホールのオーケストラの響きをわが家で聴きたいとの夢を持ち続けている。'89年に本誌でスーパーステレオを知ってから、この装置に望みを託し、爾来独自の研究を進めて来た。そして、音場を3次的に再現すれば、コンサート・ホールの響きが再現できるとの一種の仮説を立てた。この仮説を実証するべく実験を重ねた結果、HSS(平本式スーパーステレオ)方式にたどり着いた。昨年本誌7月号で詳細を発表させていただいたので、読まれた方も多いと思う。

筆者が仮説を立てた経緯はつぎのようなものである。

- ・2チャンネル音源をヘッドフォンで聴くと、音場情報がたつぷりと入っている。
- ・2チャンネル・ステレオでは空間でクロストークが発生し、音場情報の一部が欠落する。
- ・この欠落音場の補填と3次元音場の構築を兼ねて、フロント、ミドル、リアの3カ所で天井近辺から音場情報を放出する。
- ・音場情報はタイム・ドメインで遅延処理されたものではなく、周波数ドメインで処理された情報(スーパーステレオで生成)を使う。
- ・サブチャンネル情報は4チャンネル分しか確保できないので、フロント

家にコンサート・ホールがやって来た

HSSシステム、その後の進化

平本 修

昨年暮れに、高橋和正さんから「マランツの新しいプレーヤとクリーン電源を入れたよ」とのお声がかかり、年明け早々に出かけて来ました。クリーン電源に関しては私の方の導入が早かったのですが、マランツのプレーヤに関しては、性能は納得できたものの、高額なために二の足を踏んでしまいました。

しかし、高橋さんのいうように「この先の寿命が少なくなって来たので、やるべきときにやっておかないと……」と購入の決断をしました。そして、この判断が正解であったことがまもなくわかりました。かつて、「こんな風に聴こえないかな〜」と夢に描いていた音が眼前に現われ、ひどく興奮しました。これはすごい。

昨年本文でご紹介していただいたばかりなので、読者に「またか……」と愛想を尽くされるかとは思いましたが、大げさにいえば歴史的事実として報告しておく必要があるだろうと、この原稿を書きました。

× ×

オーディオ愛好家の多くは、コンサートホールの響きを求めてオーディオの世界に入ったと思われる。しかし、現在に至るまで、コンサート・ホールの響きを再現することはできていない。50年に及ぶオーディオの歴史の中で、機器の性能は飛躍的に向上したというのに不思議なことがある。もはやそれは不可能と諦めの境地に達しているかたも多い。

しかし、諦めるまえに考えてみる

とミドルは同一信号を使用する。ただし音量は別個に設定する。

上記方針で実験を進めた結果、昨年ほぼ実用的にはホール・トーンを再現できたと思っていた。しかし、本年になってさらに性能が向上し、もはや仮説ではなく「HSSでホール・トーンが再現できた」と実証宣言ができる段階に至った。

飛躍のキーとなったのはマランツのプレーヤ SA-7S1 の登場である。このプレーヤは、本誌のグランプリ評でも空間再現能力に優れていると語られている。HSS といえども所詮音場の補填技術である。補填量が少なくてすむならそれに越したことはない。SA-7S1 はまさにこの補填量の削減に絶大なる効能を発揮した。

SA-7S1 を迎えて、効果チャンネルの音量レベルを再調整した。幾度かのチューニングを重ねた結果、眼前に目の覚めるような鮮やかな音像が展開した。広いホールの空間が認識

でき、奥行きが深いステージが見える。音像だから見えるわけではないが、音像が実像として出現するので、「見える」と勘違いする。部屋の壁は完全に消失してしまい、まさしくそこにはコンサート・ホールの広い音響空間がある。

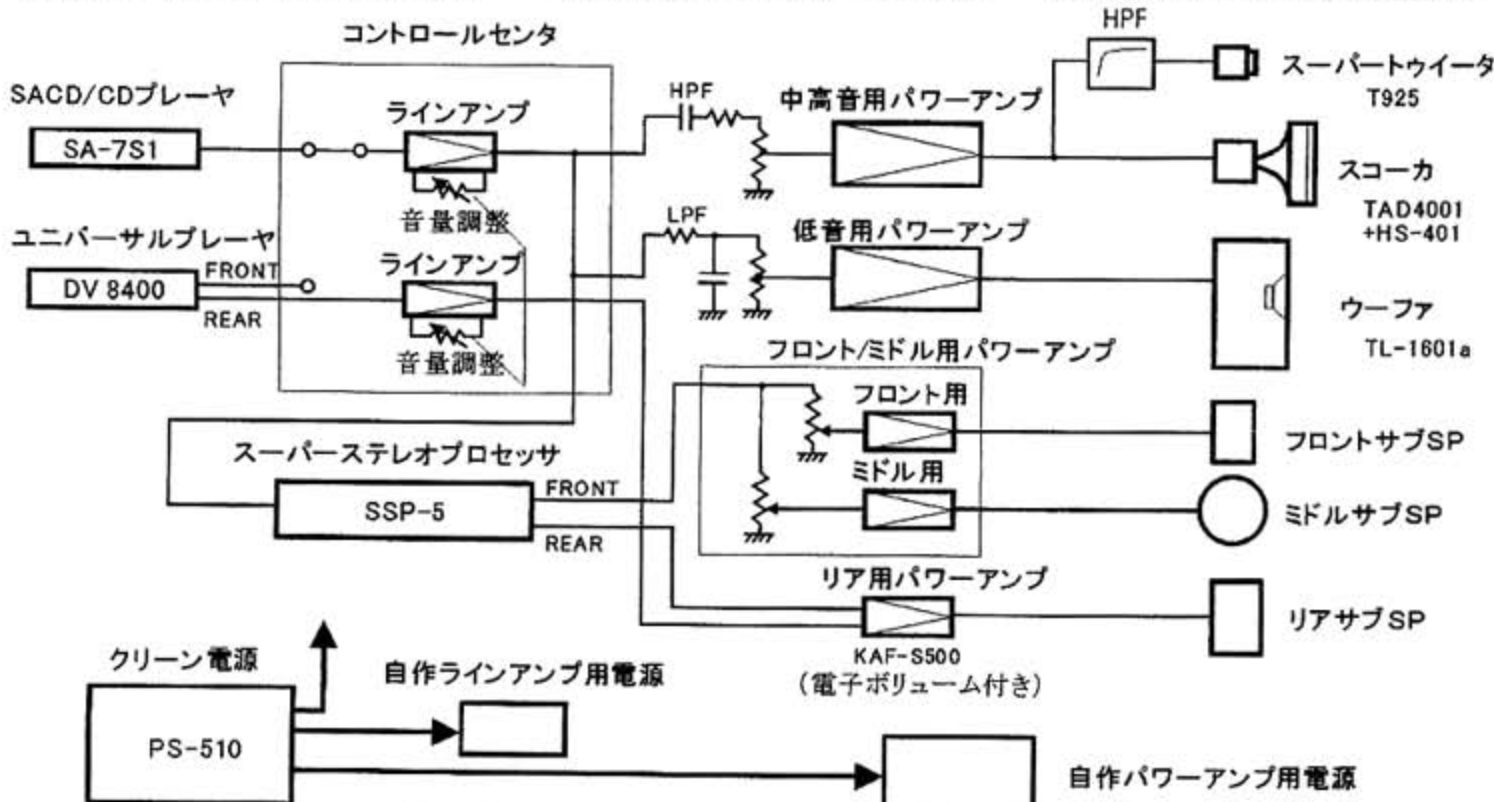
個々の楽器の音像は鮮明極まりなく、各楽器が分離され、ピン・ポイントで定位する。全楽器が同時に鳴っても、ダング状になることはなく、混濁することもない。ヴァイオリンはしなやかに響きわたり、木管の音には澄み切った透明感がある。金管は力強く輝き、低弦は深々と柔らかく伸びやかに響く。ティンパニはステージ奥で轟き、グランカッサの一撃はホールの空気を揺るがす。羽毛で撫でるような弦の微かな弱音がはっきりと聴き取れる一方で、トゥッティではホールを圧するオーケストラのすさまじいエネルギーを感じ取れる。

聴感上のダイナミック・レンジが

大幅に拡大されているのである。まさに実演さながらの興奮である。これは、いままでに想像だにできなかった音の世界だ。遂にコンサート・ホールが我が家にやってきた!

多くの読者のかたがたは「残響を付加して音像が鮮明になるなんて……」と眉に唾されるだろう。しかし、この概念こそがオーディオの発展を阻害してきた。残響付加の試みは過去何度となく行われて来たが、それは「響きを豊かにする」という考えから一歩も抜け出せなかったからである。響きを豊かにするのではなく、「3次元音場を再現する」という考えに立たなければ、いくらトライしても成功しない。

3次元音場が構築されるとなぜ音の実像が出現するのか? 実像とは実際にそこに楽器が存在するような感覚があることをいう。考えてみれば、目の不自由なかたは、楽器の音のみを聴いているのではなく、周囲の構築物によって生じる反射音をい



●新 CD プレーヤを入れて音場再現能力が高くなった平本氏の HCS システム

っしょに聴いている。この反射音を聴くことで、周囲の構築物と楽器との位置関係や空間の大きさを認識している。

これが正真正銘の実像認識で、音像は3次元音場の響きと一心同体となって認識される。映像のないオーディオの世界も状況は同じことで、3次元的な残響を楽器の音と同時に聴かなければ、実像は出現しない。単に残響を楽音といっしょに放出しただけでは、実像が出現することはありません。

SA-7S1が音場再生能力に優れているということは、ディスクに含まれているデリケートな信号を残さず再生してくれるということだろう。事実ふつうのCDの再生にも抜群の性能を発揮する。

ここにブルーズ/ウィーン・フィルのマーラー/3番のCDがある(2001年録音)。これをブラインドで聴かされて「CDかSACDかを答えよ」といわれたとしても、筆者には正解する自信がない。ハイブリッド盤でCDレイヤーとSACDレイヤーを聴き比べれば、わずかな音質差が認められる。しかし、よくできたふつうのCDに比べると、ハイブリッド盤のCDレイヤーの音は見劣りがするような気がするが、これは思い過ごしか。

とにかくHSSによる実像の感動は、そのような些細な違いをはるかに超えている。25年前のドラティの「春の祭典」を聴くと、その鮮やかな音像とすさまじい臨場感に圧倒される。ふつうのCDでナマ演奏さながらの実像が楽しめるとは、何と幸せなことか!

いまオーディオは新しい時代を迎えようとしている。音場元年といっ

てもいい。3次元音場を構築すれば、コンサート・ホールの響きが再現できることがはっきりと実証できた。HSSでの3次元音場の再現精度はまだ未熟だとは思いますが、それでもこの実像の音を耳にすれば、どなたも愕然とすることだろう。

今回の実証に供したHSSの詳細ブロックを図に示す。ユニバーサル・プレーヤが接続されているが、5.1チャンネルのテスト用であって、常用はしていない。常用システムの総額は概算で300万円である。プレーヤとプロセッサで100万円弱、メイン・スピーカ群(20年間使用)で100万円、アンプ/サブスピーカ/クリーン電源で100万円強というのが概略の内訳である。

高いといえば高いが、グランプリ金賞のプレーヤが200万円近くすることを思えば、ハイエンド・システムとしては格段に安い。いや、ハイエンド・システムの範疇には入れてもらえないかもしれない。1000万円超のデモ・システムを何度か聴いたことがあるが、この世界、金をかければいい音がするとは限らない。超高級機に手が届かないからといって諦めることはない。

なお、試聴に見えたかたで「ホーンなのに、どうしてこんなにピン・ポイントで定位するのか」と不思議がられたかたがいた。筆者は位相調整の賜物と信じている。くわしくは'03年3月号の本欄を参照されたい。

最後に、音場に注目して意欲的に技術開発を進めるマランツ技術陣に拍手を送るとともに、感謝の意を表したい。できうれば、この高性能機を安価に提供できるように努力をしていただければ有難い。